

先日助けて頂きました。

柴猫侍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本のどこかにある神社、付喪神社。

そこにはなんでも恩返しをしたがる者達の人足が絶えないというではないか。
彼等は決まってこう告げる。

「先日助けて頂きました」――と。

ネットのボケよろしく、なんでもかんでも恩返しに来る者達とのやり取り……是非と
も見ていってはどうですか？

先日助けて頂きました。

目

次

先日助けて頂きました。

日本の山奥のどこか。そこにひつそり佇んでいる神社があつた。

名を付喪神社。^{つくもじんじゃ}なんでもここは、江戸時代より前の時代から続く由緒正しき神社であり、様々な精靈が集うとの噂もある。

そうこう言っている内に、ほら、今日もまた来客が訪れたようだ。

「ニヤー」

「おや、これは可愛いお客様さんだ」

落ち葉が風に吹かれて舞う中、参道を竹箒で掃除していた一人の男性が、茂みの奥よ
り出てきた来客を出迎えた。

これはなんとも可愛らしい来客だ。ふわふわとした毛並みはまるで新雪である。それでいてピンと立っている尻尾には、神主である男性の方が飛びつきなってしまう程度だ。

そう、現れたのは生後間もないであろう子猫。

2 先日助けて頂きました。

ぴよこぴよことたどたどしい足取りで近づいて来る子猫に対し、神主は竹箒を立てかけた後、喉元を搔くように撫でてみる。

すると子猫は気持ちよさそうにコロコロと喉を鳴らす。

このまま飼つてしまいたくなる可愛さであるが、そういう訳にもいかない。こんな山奥に飼い猫が迷い込む可能性などありはしない。となれば、この子猫は親猫とはぐれてしまつて神社に迷いこんでしまつたに違いないだろう。

きつと親猫が心配している。この子猫を返してやらねば。

神主が子猫を抱き上げ辺りを見渡すものの、どうにも親猫の姿は見当たらない。

「はて、困ったもんだ」

そう呟くや否や、鳥居の方から大きな人影がやつて來た。

かなり大きい。偉丈夫という言葉が似合う体格と無精髪。ワイルドな雰囲気を漂わせている男は、のつしのつしと重い足音を響かせ、神主の下まで歩み寄つて來た。

「どうも」

「おや、これはどうも」

「僕は先日助けて頂いた熊です。今回はそのお礼に上がりました」

「それはまた、わざわざご足労いただきありがとうございます」

懇切丁寧に『熊』と名乗つた男にお辞儀をする神主。

子猫は目の前の男性を警戒しているのか、ふしゃー！ と毛ほども怖くない威嚇をする。そんな子猫を宥めるように撫でる神主は、『ちょうどよかつた』と熊にこう頼む。「来てもらつて早々申し訳ないのですが、この子猫の親猫を探してもらいたいのです」「成程。では、それを恩返しとさせて頂きましょう」

熊の嗅覚は、人間の100倍も嗅覚が鋭い犬よりも優れている。

それほどまでに鋭敏な嗅覚があれば、子猫の親を探すなど簡単なこと。

くんくんと子猫の臭いを嗅いだ熊は、先ほど子猫が現れた茂みを超えていき、鬱蒼と木々が生い茂る道なき道を進んでいく。

すると、辿り着いた先にこれまた大きな茂みがある。視線で促された神主がちよいちよいと茂みを突けば、もぐらたたきよろしく子猫が茂みから飛び出て来たではないか。

「ここが猫たちの住処だつたという訳ですか」

「いずれは親も帰つて来るでしょう。……ほら、噂をすればちょうど」

熊が顎で指し示す方向には、ちようど帰つてきたと思しき親猫が、見慣れぬ男二人に對して毛を逆立てて威嚇していた。

そんな親猫の威嚇を『おお怖い』と冗談めかして呴く二人は、子猫を勝手にじやれていた他の子猫たちの輪に戻し、さつさと神社の方へと戻つていく。

4 先日助けて頂きました。

歩いて数分もかからぬ道。にやーにやーという声に若干後ろ髪を引かれるもののな
んとか戻つて来た二人は、一仕事終えたと言わんばかりにふうと息を吐いた。

「これで安心ですね」

「お役に立てたでしょうか?」

「ええ、ありがとうございました」

「いいえ、儂は恩返しをしただけのこと」

『それでは』と恩返しを済んだ熊は、またのつそのつそと鳥居を潜る。

刹那、熊の姿はあるで霧の中にでも紛れるかのようにフェードアウトしたではない
か。

その光景を見届けた神主は、嬉しそうに、それでいて寂しそうに笑みを一つ零したの
であった。



「ふう、最近は肌寒くなつてきていけない」

季節的には一足早いこたつに足を突っ込んでいる男性。彼こそが、この付喪神社九十

九代目の神主である。

何代続いている等の話はさておき、この付喪神社で神主を務めている者には不思議な力が宿るのだ。

それは、助けたものが恩返しに来てくれるというもの。

『鶴の恩返し』のように動物が恩返しに来ることもあれば、道具や道端にある石ころ、果てには得体の知れない物体まで……兎にも角にも神主に助けられたと判断されたものが、この付喪神社まで足を運んで来ては、彼等なりの恩返しをしてくれるというものだ。

この神社に構えている鳥居は、彼等を迎える為の出入り口。近所は勿論、数キロ離れた町や山、そして海まで繋がる摩訶不思議な鳥居には、神主に恩返しをしたいと願う者が自然と導かれては、人の形ナガリとなるといふこれまた摩訶不思議な力が働く。

「おや？」

不意にコンコンと響く玄関。

客人かと神主が出迎えれば、そこには橙色の着物の上に銀色の羽織を着た妊婦が立つていた。

なんとも見目麗しい女性だ。しかし、美しい女性を目の前にした神主の内心は滝の流れの如く急降下であつた。

(そう言えばそんな時期か)

表情には出さぬものの、神主は容易に想像できた相手の正体と、これから繰り広げられるであろう展開に身構えた。

「こんにちは。貴方はどちら様でしようか」

「わたくし、先日助けて頂いた鮭です」

「これはこれは……」

秋。それは鮭が産卵のために故郷の川を上る季節である。

今年もまた、先日——もとい、昨年助けた鮭の子供が恩返しにやつて来る時期が訪れたという訳だ。

一部の紳士であれば、見目麗しい妊婦を前に『げへへ、恩返しだつて？　だつたらなにをしてもらおうかな』と考えるところだが、これから始まる展開は恐らく脳味噌真つピンクな紳士淑女でもドン引きのヴァイオレンスな展開になりかねない。

「早速ではありますが、人間の方々はいくらがお好きと聞きました」

「まあ、人によりますが」

いくら。つまり鮭の魚卵である。

現在目の前の女性——鮭さんのお腹には、いくらがパンパンに詰まっているのだ。

「そこで、わたくしが産んだものをお召し上がりいただければと」

「やめてください」

「流れに逆らつてはいる感があると産みやすいので、少し風呂場をお借りすることはよろしいでしょか?」

「やめてください」

「あ、もしかして筋子の方がお好きで? であれば包丁を。一思いに腹を搔つ捌いて……」

「やめてください」

目の前の鮭さんが命懸けで産んだいくらを食せなど、そんな残酷な真似が出来てたまるだろうか?

本人が良くて、神主的にはNOである。

因みに一般的に知られている鮭は、産卵した直後に死亡するという遺伝子情報が組み込まれている為、体力の有無に関係なく産んだら死ぬ。

風呂場でいくらを生んで死亡する女。軽く……否、かなりホラーである。ちよつとした殺人現場よりもS A N 値が減ること間違いなしだ。

「私にいくらを食べさせるよりも、無事に川でお子さんを産んでくれる方が私にとつて恩返しですので」

「ああ、なんと慈悲深いお方なのでしょう。そこまで言うのであれば……」

8 先日助けて頂きました。

ほろりと目から涙を零す鮎さんは、神主の必死な説得を受けて帰った。

しかし、こうして鮎さんを帰らせた結果として、来年この鮎さんが産んだ子供が再びやつて来るというサイクルが生まれてしまっていることを、この神主はまだ知らない。このように、恩返しに来てくれる者達の中には、恩返しとは言い難い行為を試みようとする者も居る。

大抵は神主が何とか説得して帰すものの、時には中々帰ってくれない場合も居た。「アタシは先日助けてもらつたカマキリだ。恩返しに来たぞ」

「これはどうも」

「つつー訳で、夜伽でもしてやる」

「それはちょっと」

先日助けたカマキリさん（♀）が夜のお誘いをしてくるも、神主は断固として拒否をした。

だつて、カマキリだもの。終わつた後、頭からバリボリ食べられてしまうのは頂けない。

歴代の神主の中には、この恩返しの能力を用いて毎晩毎晩ハーレムを作るといったような性豪も居たとされるが、ある日行方知れずになつたという事件があつたらしい。恩返しをし易くする為に人の形にこそなつてはいるが、根底にある本能は元の生物や

物体に準拠する。

カマキリのメスであれば、交尾後に栄養を摂る為に交尾していたオスを食べるという行為に出かねないという訳だ。いつ頭から貪られるか分からぬスリル満点な夜伽になること間違いなしである。

そんなカマキリさんには夜伽ではなく夕食の準備を手伝つてもらい帰つてもらつた。当人は不完全燃焼氣味に膨れていたが、命がかかつてゐる。仕方がない。

突然だが、やつて来た者の恩返しにはある程度傾向がある。

簡単なもので言えば、発情期や繁殖期に入つた生き物——特にメスである場合、男である神主と夜伽しようとするとといったものだ。中にはオスも求めてくる。アーッ！ な展開の可能性も否めない。

さらにもう一つ、傾向を把握できている者達も居る。

「先日助けて頂いた蜂蜜です」

「蜂蜜」

「恩返しに私の甘い蜜をどうぞ」

「やめてください卑猥に聞こえますから」

どうやつて助けたかが疑問の食べ物たちだ。

食べられることこそが本懐の彼等は、総じて恩返しに食べられたがる。

とは言うものの、恩返しに当たつて人の形となつてゐる訳であつて、そのまま食べればカニバリズム不可避だ。

つまり、彼等の言う『食べる』は漏れなく性的な意味となつてしまふ。おかしいね。

「先日助けて頂いた甘エビです」

「去年も来ましたね。つていうか、なんか見た目変わつてしまん?」

「甘エビは5歳くらいになるとメスになるんです。ぶりぶりです。食べべごろですよ」「食べませんから」

「先日助けて頂いた甘栗つす」

「随分トゲトゲでパンキーなファッショソンしてますね」

「今はこんな服着てるつすけど、剥いちゃつてくれて……いいんすよ?」

「遠慮しておきます」

「先日助けてもらつたところてんだ。どうか俺を食つちまつてく――」

「助けてませんので。それでは」

「あ、あ、あ、あ、あ、!! 最後まで言わせてくれよおおお!! 賞味期限が切れちまうんだよおおお!! 誰もスーパーで買つてくれないんだよおおお!!」

ところてんのブルンブルンとした慟哭を軽く流す神主。

このように助けた食べ物が神社にやつて來ることは珍しくない。

一方で、食べ物ではない者がやつて来る場合がどうなのかと言えば、大方予想は付くかも知れないだろう。

「先日助けて頂いた脚立です」

「助ける要素ありますか?」

「さあ、上りたい場所があればどうか某を踏んで高みへ!　さあ!!　さあっ!!」
「ありませんから」

このように、本来の用途で役に立ちたがる。

脚立であれば今のように高い場所へ上る為の足場として。ただし見た目は、そそここ中年なサラリーマン風の男性である。

見た目が人になるだけで、道具というのはこうも使いづらくなるものなのか。世の中にはあえてそういうふたデザインにした商品も存在するが、それと似たような——否、それ以上に忌避感を覚える。

「先日助けて頂いたトイレットペーパーです」

「はあ……」

「さあ、私の身に纏うこのトイレットペーパーの衣を用い、不浄の穴に纏わりついた汚物を拭つて!」

「この場で自分の服をビリビリ引き裂かないでください」

12 先日助けて頂きました。

「先日助けて頂いたスリッパです」

「スリッパ」

「是非とも履いてください」

「履く」

「もしくは何かを叩く為に使つてください」

「叩く」

「先日助けて頂いたCDプレイヤーです」

「何か音楽でも流してくれるんですか?」

「お望みとあれば…………ふえに～すも～んじや～♪」

「生声で歌うんですね」

このように、人の形になつたばかりに本来の性能を引き出せず、何とも言えない恩返しをして去つていく者もちらほらと居る。気持ちはありがたいものの、ツツコミどころは満載だ。

「本当に、気持ちだけはありがたいんですけど……」

『一日一善』と『一期一会』の文字が書かれた掛け軸を飾つて居る部屋に掃除機をかける神主は、誰に言う訳でもなく呴いた。

生来のお人よしである彼は、困つている人を見かけたら見過せない。困つている生

き物も、それこそ無造作に捨てられている食べ物や道具でさえ――。

生き物は勿論、『八百万の神』といった言葉があるようすにこの世の神羅万象には神が宿つてゐる。

神に仕える彼が、そんな神たちを見捨てられるだろうか？　いや、できない。

「たのもー！」

「おや？」

昼下がり。そろそろ干していた布団からお日様の香りが漂つてきた中、わんぱくそうな声が響き渡つて來た。

何事かと声の方へ振り向けば、そこにはいかにも天真爛漫そうな猫目の幼女が佇んでいるではないか。

「みやーは、このまえたすけてもらつたねこなの！」

「ああ、あの時の」

「だから、おんがえしにきたの！　えらいでしょ！」

えつへんと胸を張る幼女——もとい、この前助けた子猫ちゃん。

たどたどしい言葉遣いながらも立派に恩返しに來てくれた子猫ちゃんへ、神主は『偉いねー』とベタ褒めする。

しかし、本題はここからだ。用件を思い出したかのように子猫ちゃんはハツとする。

「ねえねえ、なにすればいいの？ なにかすることある？」
「うーん、そうだなあ……」

「こんなに小さな子猫ちゃんだ。できることは数える程しかないだろう。
じゃあ、このお布団を取り込むのを手伝ってくれますか？」

「おふとん？ このふわふわ？」

「そうですよ」

「はあーい！」

神主に頼まれた子猫ちゃんは、『んしょ、んしょ』と一生懸命布団を回収して家の中へ
と運び込もうとする。

しかし、子猫ちゃんの小さな体では布団一枚取り込むのも一苦労だ。

そこで神主さんは、少しでも子猫ちゃんの負担が少なくなるようにと、彼女が抱えて
いる布団の反対側を持ち上げた。

一気に重量が軽くなる。というより、完全に手を添えるだけになつてしまつた子猫
ちゃん。

ぶるぶると手を掲げつつ、布団はあつという間に室内へ。

ボフツと空気が吹けば、子猫ちゃんの前髪がふわりと舞い上がる。
「んみや」

一仕事終えた子猫ちゃんの視線は、次なる布団——ではなく、たつた今室内に取り込んだ布団へと向けられている。野生の生活では触れたこともないふわふわで、それでいてぽかぽかな物体。

子猫ちゃんは既に釘付けであつた。

目の前にある布団はにゃんこホイホイと化している。

本能がまだ小さな子猫ちゃんの体を突き動かす。母とも違うふわふわぽかぽかな物体へ、まるで吸い込まれていくようになら。

「……あらら」

神主さんが次なる布団に手をかけた時、子猫ちゃんは既に布団に埋もれていた。

「ふにゃあ……♡」

なんとも幸せそうな顔をして寝ているものだ。

この間僅か数秒。子供の眠りに落ちる速度を侮つてはいけない。

幸せそうに眠っている子猫ちゃんに近寄り、ブニブニとしたほつぺたを突くものの反応はない。

「……仕方ない……ですね」

フツと笑みを零す神主は、音を立てないよう細心の注意を払い布団の取り込みを再開する。

16 先日助けて頂きました。

この神社で神主をしていると、こうした些細な幸せに出会うこともあるという訳だ。
見返りを求めて助けるのではない。

恩返しが人を喜ばせる訳でもない。

ただ、誰かの為になりたいという純粹な想いこそ、誰かを幸せにし得る力を有しているのではないか。

日本のどこかに存在する付喪神社。

今日も今日とて、恩返しをしたがる者達が足を運んでくる。
前口上は決まってこう。

「——先日助けて頂きました」

善因善果。今日から善いこと始めてみませんか？